

# スパルタの二王制をめぐる二、三の問題

新村祐一郎

【要約】 筆者は、さきに、「スパルタのエポロイ」(『西洋史学』LVII号)、「スパルタのGreat Rhetraに関する二、三の問題」(『西洋古典学研究』XXII号)において、ポリス・スパルタの成立期に関する研究成果を報告したが、本稿もその続編として、スパルタの王制についての問題をとりあげ、二王制の成立を考察し、さらに、キング・リストの再検討を行なった。

二王家は、共に、ドリス人の部族長に発していると思われるが、長い覇権争いの結果に出現したものであるため、それぞれの王家となったのが、本来の三部族(Hyleis, Pamphyloi, Dymenes)のうちのいずれの二部族より出たものかを推定することは困難であること、テレクロスの覇権確立によって、王制の第一歩がふみ出されたこと、を論じ、また、二王家の系図が、ヘラクレイダイの系譜と結合される経緯を考察する。

史林 四八巻二号 一九六五年三月

ギリシアのポリスの本質をきわめるには、古典期のポリス、すなわち、ポリスの、いわば、完成期のみを考察するだけでは、不十分である。当然、その成立および衰退の時期が問題とされねばならない。私は、これまで、スパルタを考察の対象にえらび、主として、その成立期をとりあげてきた。そして、その際、このポリスの成立と不可分に結びついていると思われる「大レトラ」の

考察を行ない、その制定時期を紀元前七六〇年代、と推定し、<sup>①</sup>また、エポロイ制の成立およびその発展の考察において、その権力掌握の過程を王権との関係においてとらえた。<sup>②</sup>しかし、その根本であるポリスの成立の時期については、いまだ、結論を出していなかった。この問題をとりあげられる場合には、当然、スパルタの二王制の成立の問題がかかわってくる。本稿では、二王制の成立事情および二王家の Hyleis の再検討を通して、ポリスの成立期を探りたい。それと同時に、「大レトラ」の考察を行なっ

た際に、保留しておいた *archagetai* の実体にも言及するであらう。

古代ギリシアにおいて、スパルタの二王制は、特異な存在であったといわれる。それは、単に二王家出身の二人の王が同権をもつて、共同支配するという点において特異であったのみでなく、古典期、さらに、ヘレニズム時代に至るまで、その王制を維持していたという点でも、特異な存在だったというのである。王制が後代まで、維持されたのは、王権がエポロイによって縮少せしめられていたことも関連があるが、この問題は他の機会に譲ることにし、ここでは、二王制の成立事情を、まず、考察する。

① 拙稿「スパルタの Great Rhetra に関する二、三の問題」(『西洋古典学研究』XII、一九六四年、二七一—三九頁)。

② 拙稿「スパルタのエポロイ」(『西洋学』LVIII、一九六三年、一—一八頁)。

## 二

二王家の系譜を伝えるものに *ノロトリス* (VII. 204; VIII. 131) があるが、さらに、*ハウサニアス* (III. 21-108) にも、*ノロトリス* とは、部分的に、異なる系譜が見られる。しかし、共に、二王制が *Eurythenes* と *Prokles* との兄弟が、同時に、王位についたことに起因すること、したがって、二王家共、*ヘラクレス*

の子孫 (*Herakleidae*) と称していることにおいては、一致している。しかし、この二王制起源説は、にわかに、信じがたく、多くの研究者も、それぞれ、二王制の起源について、独自の見解を示している。<sup>①</sup>

根本的な問題として、二王制——というよりも複数王制——が、*ドリス人* に本来的であるか否か、ということがある。これを本来的なものとして認めているのは *Berve*, *Michel* など、<sup>②</sup> 否定的な立場をとるのは *Dickins*, *Chimes*, *Wilcken*, *Oliver* などである。<sup>③</sup> 後者は、当然、*ドリス人* の *ペロポネソス* 侵入後に、複数王制の起源を求めている。また、*ドリス人* に本来的であるか否かを、直接論じてはいないが、二王制の起源論を通じて、言外に、本来性を否定するものは、きわめて、多い。

以下、二王制の起源に関する諸説をいくつかのグループに分けて紹介しよう。

(A) 第一にあげるべきものは、集住乃至合同説とも称すべきものである。すなわち、この説は、二個の異なった共同体の合体によって、一個のより大きな共同体 (*ポリス*) を形成した時に、その各々の共同体の首長が共同統治者となった、とするものである。この説をとるものは、*Wachsmuth*, <sup>④</sup> *Duncker*, <sup>⑤</sup> *Gilbert*, <sup>⑥</sup> *Dickins*, <sup>⑦</sup> *Lenschau*, <sup>⑧</sup> *Bury-Meigs* などであるが、その各々の間には、若

干、ニエンスの相違があるのは当然である。すなわち、Dunk  
ker はドリス人の二個の共同体の合体と見なしているのに対し、  
Wachsmuth, Lenschau はドリス人の共同体と土着人（先住ギ  
リシア人）の共同体との合体と見ている。

(B)第二にあげるものは妥協説である。これは、覇権をめぐる  
対抗する勢力者が同権の協同支配者となる、という条件で妥協し  
た、とするものである。この見解を主張するのは Pohnann,<sup>13</sup>  
Woodward,<sup>14</sup> Michell,<sup>15</sup> Huxley<sup>16</sup> などであるが、Pohnann は対  
抗する貴族間の妥協とすのに対して、Huxley は四派（四村落）<sup>14</sup>  
間の妥協という。また、Michell は chieftain 間の妥協と見て  
いるが、この chieftain の実体は、(C)で述べた Ehrenberg のい  
う部族王乃至部族長と思われる。これらの論者は、いずれも「二  
王」という表現を、はっきりとは、用いておらず、妥協した貴族、  
首長の数が、二以上の複数であることを暗示している。

(C)第三に三部族長（部族王）説というべきものがある。これは、  
ドリス人の三部族の首長が合同した結果、スバルタの王制が成立  
した、と説明するものである。Ehrenberg, Pareti<sup>17</sup> などがこの見  
解をとっている。しかし、この見解をとる場合、三部族と二王家  
とを如何に結びつけるかが問題となるが、Ehrenberg は成立し  
た三王家のうちの一家は、早く、消滅した、とし、Pareti は

三部族長のうちの一人のみは王を称さなかったことに起因する、  
とみなしている。なお、Pareti は、三部族長が権力を掌握する  
以前に、一人の王による支配の時期があったことを認めており、  
一人王制の衰弱の結果、権力は三人の部族長に移ったのであり、  
一人王制と複数王制との間に断絶 (rotura) があることを主張し  
ている。<sup>18</sup>

(D)次に、アギス家有力説がある。スバルタには、アギス、エウ  
リュポン両王家が併立しているが、そのうち、アギス家の方が他  
よりも古い、または、卓越したものであった、と考えるものであ  
る。この見解は Niese,<sup>19</sup> Chrimmes, den Boer,<sup>20</sup> Oliver<sup>21</sup> の主張す  
るもので、このうち、Niese と den Boer はアギス家の方がエウ  
リュポン家よりも卓越しているとしており、Chrimmes, と Oliver  
とは、より古いと述べている。この説はヘロドトスの記事と一致  
するという利点があるが、そのことは、必ずしも、この説の蓋然  
性を高めるものではない。

(E)ほかに、一説とはいい得ないかもしれないが、二王制の起源  
を不明とする論者も、若干存在する。Busolt,<sup>22</sup> Andrews,<sup>23</sup> Bengt-  
son<sup>24</sup> などがこれである。Busolt は、多くの見解を紹介した後、  
いずれも、「単なる可能性の域を出ない」と述べ、Bengtson は  
「二王制の起源は明らかでない」とい、Andrews は「起源は、

非常に、古く、はっきりしたことはいい得ない」と慎重である。

なお、以上の(A)―(D)の中に分類し得ないものとして、エウロタス河谷の上流域を共有する二名の指導者 (Fueher) を二王家の祖とする、と述べる Neumann、また、スバルタの三種族 (Stämme) をドリス、アカイブ、Aigeidai とする Hermann-Thunser などがある。

さて、一般に、二王制というものが、ギリシア世界において、特異なものであったか、という点、必ずしも、そうはいいい得ないようである。Michell も述べている如く、非常に、多くの例をあげることが出来るからである。しかし、スバルタの如く、長期間にわたって、その制度が維持された場合は、他に見られなう。

スバルタの二王制は、しばしば、ドリスの三部族との関連において説かれる。ドリスの三部族とは、周知の如く、Hyllis, Pamphyloi, Dymanes である。彼らの移動する際には、部族長 (phylarchoi) に引率をされて行なわれ、ヘロポネソスへの侵入の場合も、同様なことが、当然、予想される。したがって、ドリスが三部族より成っている以上、ヘロポネソスへの侵入の当初は、部族長も三名存在した、と想像することができよう。Ehrenberg が二王制の成立する以前に、三名の部族長乃至は部族王 (phylodais) の時代を予想するのは、かかる事態からの類推である。ド

リスの三部族とスバルタの二王家との関係を如何にして説明するかは、極めて、難しい問題である。(前述の說参照)。

伝承によると、スバルタの二王家は、共に、Herakleidai であるが、トゥキデデス (I. 12) は、ドリス人は Herakleidai と共にヘロポネソスを占拠した、と述べている。三部族のうち、Herakleidai であるのは Hyllis のみである。しかし、この Hyllis が、終始一貫、他の二部族より、特に、優位を保っていたとは信じ難い。しかも、伝承は、この三部族のはかに、Aigeidai なるものの存在を伝えている。Aigeidai に関しては、異なった伝承が併存している。一説 (Arist. Et. 532) では、スバルタがアミククライを攻略するに際して、援助をテバイの Aigeidai に求め、Timonachos というものが応じてスバルタに來たり、スバルタ人を指揮して、非常な名声を得た、といわれている。また、別の説 (Hdt. IV. 149) によると、カドモスの一族で、スバルタ王家の近縁にあたる Theras の孫 Aigeus の名にちなんで、その子孫が Aigeidai と呼ばれるに至ったとする。なお、Theras 自身は各部族の一部のものとミューアス人を連れて、カリスタ島 (後た、Theras にちなんで、テラ島と呼ばれる) に植民している。この伝の系譜には、当然、Timonachos という人物は現れない。以上の両説に共通していることは、ドリス人と共にテバイ系の

一派が、スパルタに存在したことを示している点である。ヘロドトスの伝える後者の伝説は、スパルタ人の伝えるものである (Hdt. IV. 150) が、アリストテレスの伝える前者は、スパルタにテバイ起源と称する Aigeidai というものがあることを説明せんがために、スパルタ以外の地で生じた伝説であろう。<sup>95)</sup>

ドリス人がスパルタの地に入ったのは、前一二世紀と思われるが、その際、ヘラクレスの子孫——と称する——Aristodemos に率いられていた、と伝承は伝えている。そして、このヘラクレスの子孫が三部族中の Hyllis (ヘラクレスの子 Hylos の名による) であり、他の二部族は、共に、ドリス人の伝説上の王 Argimios の二子 Pamphylos, Dymas を名祖とする Pamphyloi と Dymanes である。しかし、これは、おそらくは、ドリス人自身の自己宣伝であり、近年は、Hyllis を Myris 人と見なし<sup>96)</sup> (ドリス人は Myris 人に圧迫されて南へした)<sup>97)</sup> Pamphyloi を、その名称からして、「多くの部族の出身者の集合体」と考える見解が有力視されている。なお、Dymanes という名は北西ギリシア系であろう。<sup>98)</sup> スパルタに侵入したドリス人も、三部族に分れていたことは確実である。しかし、スパルタというポリスが成立するまでには、様々な紆余曲折を経ているであろう。三部族の部族長の間に覇権をめぐっての闘争が長らく続いていたことは、ヘロドトス (I.

95)、トゥッキュデデス (I. 18) の記事からも、うかがわれるし、その争いにテバイ系が加ったこともあり得ようが、部族長間の争いは、当然、各部族内の有力者達の間の対立抗争を誘発する。かくして、おそらくは、不特定数の有力者が覇権を称えるような時期も存在したであろう。したがって、後に、王家となったアギス家、エウリュポソ家、さらに、テバイ系の子孫と称するアイゲウス家の各々が、三部族のうちのいずれに属しているかということを知る手がかりはない。

アギス家の初期の諸王のうち、最も華々しい活躍をしたのはテレクロスである。テレクロスの時代は前八世紀の前半と認められるが、彼の治世のなかで、最も困難な事業であったのはアミュクライの征服であった (Paus. III. 2.6)。一方、エウリュポソ家のなかでは、メッセニア戦争の時代 (前八世紀後半) の王テオポソスが出色である。テレクロスのアミュクライ征服によって、スパルタの五区<sup>99)</sup>がスパルティアタイの住地となったのであるが、このほか、テレクロスはエウロタス河下流域<sup>100)</sup>を征服している (Paus. III. 2.6)。以上の如き活躍によって、テレクロスが、はじめて、部族長の中で、一頭地を抜く存在となったのではなからうか。なお、先にみた如く、アミュクライの征服には、テバイ系の協力があつた、との伝承があるが、この伝承の伝える征服が、テレクロ

スのそれを指すものか否か断定することはできない<sup>③</sup>。しかし、テ  
レクロスのそれが、きわめて、困難を伴ったものであったこと  
が知られる（Paus. III. 26）から、テレクロスが他の部族長の  
協力を求めたことは、大に、あり得る。そして、その際、エウリ  
ュポン家の中には、アミュクライ征服に関与した伝えが、まった  
く、存在しないから、協力したものがあつたとしても、エウリ  
ュポン系のもではないであらう<sup>④</sup>。

アミュクライを征服し、覇権を確立したテレクロスの、次に、  
行なうべき事業は、アミュクライを含むスバルティアタイの住地  
の再編成である。この時、テレクロスの意を汲む有力者が、立法  
者として、「大レトラ」を制定したと見られる<sup>⑤</sup>。「大レトラ」の  
第一の眼目が、前述の再編成、すなわち、新部族制度の制定であ  
るのは、このためである。「大レトラ」の第二の眼目は長老会と  
民会との法制化であるが、それは、次章で触れよう。テレクロスの  
の死後、ややあつてから、メッセニア戦争（第一次）が勃発する  
（略前七三六年）。この戦争を、主として、指導したのはエウリ  
ュポン家のテオポンボスであつた（Tyrtaos, fr. 5: Paus. III. 3.  
2: IV. 65）。しかし、この戦争の時、指揮官となつたのは、テ  
オポンボスとアギス家のポリュドロス（テレクロスの孫に当る）お  
よびテバイ系のエウリュレオンであり、この三者が、それぞれ、

軍隊の右翼、左翼、中央を担つた（Paus. IV. 7. 7-8）、というの  
である。この記事は注目に価する。すなわち、テオポンボス、ポ  
リュドロス、エウリュレオンの三者は、まったく、対等の資格で  
軍隊の指揮を行なつていたのである。したがつて、この三者は、  
いずれも、いまだ、部族長的な性格を、多分に、有していた存在  
であつた、と考へざるを得ない。このメッセニア戦争は、時期的  
に見て、「大レトラ」以後であるから、新部族制度が、すでに、  
施行されている筈である。とすれば、当時の軍隊の組織が問題と  
なる。しかし、地域的な部族が制定されたことは、必ずしも、旧  
部族の解体を意味してはいない。したがつて、当時の軍隊が新部  
族制にもとづいて構成されていた、と断言することはできない<sup>⑥</sup>。

ともかく、この時期に三名の部族長の存在が想定されることは、  
先にテレクロスによって基礎づけられたアギス家の覇権も、いま  
だ、確固たるものではなく、他の部族長と協調せざるを得ない事  
態が存在したことを意味している。そして、このメッセニア戦争  
の時代には、むしろ、エウリュュポン家のテオポンボスの方が、他  
の二人よりも優勢であつた形跡すらある（Paus. III. 32）。メッ  
セニア戦争が終つてから、約三九年後に、メッセニア人の大反乱  
がおきた（Paus. IV. 15. 1）。これが、いわゆる第二次メッセニ  
ア戦争である。この時期を前三世紀の詩人リアノスはレウテュキ

デスの治世である」としている (Paus. IV. 15. 2) が、パウサニアスは、テュルタイオスの詩<sup>④</sup> (P. 5) から、アナクサンドロス (アギス家) とアナクシダモス (エウリュポソス家) との治世でなければならぬ (IV. 15. 2-3) と述べている。パウサニアスの伝えるエウリュポソス家の系図では、レオテュキデスという王は、テオポソスから九代目で、前五世紀の初頭がその治世となっている<sup>⑤</sup> (Paus. III. 7. 9; IV. 15. 3) が、ハロドトス (VIII. 131) の伝える系譜では、テオポソスから五代目と九代目に同名の者が出てゐる。ただし、五代目のレオテュキデスが王位にいつたのか否かは議論のあるところである<sup>⑥</sup>。

第二次メッセニア戦争の頃より後、前六世紀中葉までのスバルタの情況には、不明の点が、きわめて、多い。この時期の問題については、かつて、エポロイ制と関連して、若干、考察した<sup>⑦</sup>。また、第一次及び第二次のメッセニア戦争の間の約四十年間についても、パウサニアスは、ほとんど、何も触れていない。第一次戦争後、間もなく、アギス家のポリュドロスが殺害されているが、生存中も死後も、特に、民衆には、名声が高かった (Paus. III. 3. 3) し、また、種々な改革を行なったという伝承 (Pant. Lych. 8) もある。しかも、彼の殺害者が、ボレマルコスという名門出身のものであったこと (Paus. III. 3. 3) は、当時、なほ、部族長間の勢力

争いがあったこと、そこにおいて、ポリュドロスが民衆の支持に期待していたことを推測せしめるに十分である。さらに、タラス (タレントゥム) への植民が行なわれたのも、前七〇〇年頃<sup>⑧</sup>、これも時期的に、同じく、両次の戦争の中間に位する。植民者達は避難者であった、といわれるが、これは、スバルタ本国において、勢力争いに敗れ、海外への移住を余儀なからしめられた一派であろう。これらのことは、両次の戦争の中間の時期は、決して、スバルタにとって、平穩な時期ではなかったことを物語るものである。しかも、この頃には、先に征服したメッセニアの土地の分配について、不満を持つものがあり、彼らが反乱を起したこともあった<sup>⑨</sup>。

しかし、ともかく、覇権をめぐる争いの続いた後、略前七〇〇年頃、ようやく、アギス家、エウリュポソス家の覇権が確立されたものと思われる。それは、アイゲウス家については、エウリュレオン以後の系譜が、まったく、伝えられていないことから推測されることである。ここにおいて、はじめて、二王制が確立されたのである。

① Pöhlmann, R., Grundriss der Griechischen Geschichte, 3. Aufl., 1906, S. 31-2; 原隨園「ルネタルコス伝説とその文化史的意義」(『ギリシア史研究』所収、一九二八年 三二—三五七頁) 三—五頁にも、諸説の簡潔な紹介がある。

② Berve, H., Sparta. (Meyers Kleine Handbücher 7), 1937.



② Neumann, K. J. J., Die Entstehung des spartanischen Staates in der lykurgischen Verfassung (HZ, 96, 1906, S. 1-80), S. 25-6.

③ Hermann, K. F.—Thumser, V., Staatsaltertümer (Hermann's Lehbuch der Griechischen Antiquitäten I. Band), 1889, S. 157-8.

④ Michell, op. cit., pp. 101-4.

⑤ 第四章註⑧参照。

⑥ Pind. Isthm. VII, 18 は「*Πυθιαίων*」征服の際の *Aigeidai* の援助について語つてゐる。H. W. Parke, H. W. & Wormell, D. E. W., The Delphic Oracle, 1956, vol. I, p. 85. 参照。

⑦ いわゆる「ギリシア人の第二次侵入」すなわち「西方方言群のギリシア人の南下は、前一二〇〇年頃にはじまる。彼らの故地は北西ギリシアの山地—マケドニア西部、エペイロスと見なされている。彼らはドリス人と北西ギリシア人とに大別されるが、両方言は、非常に類似している。ヘロポネソスへ侵入する場合、前者はドリス地方を経て東方から、後者は北西方から半島に入り、それぞれ、半島の東部及び南部、西部及び北部を占めた (Hammond, N. G. L., A History of Greece to 322 B. C., 1959, pp. 72 ff. 参照)。

⑧ Aristodemos が率つてきたとするのはスマンタの伝承のみで、一般には「その子 Eurysthenes と Prokles が率つてきた」としてゐる (Hdt. VI, 52)。Apollod. II, 8, 2; Paus. III, 1, 7 などには Aristodemos は「*Κατα*」ネソスに入る前に死亡した」といふ、当時の通説にしたがつてゐる。

⑨ Berre, H., Griechische Frühzeit (Herder-Bucherei Band 37), 1959, S. 64 [本書註 Berre の Griechische Geschichte, 2

Bde, 2. Aufl, 1951-2 の Taschenausgabe の第一卷(全三卷)であらう] Berntson, op. cit., S. 52; Huxley, op. cit., p. 103.

⑩ Berntson, op. cit., S. 50.

⑪ ドリス人及び北西ギリシア人の移動後にも「北西ギリシア地方には *—fves*, *—fves* 語尾の種族 (*zōnos*) が数多くあつた。Hammond, op. cit., p. 76. 藤縄謙三「ギリシアの英雄叙事詩の社会的基盤」(下)〔史学雑誌〕七三卷九号、一九六四年、六一—八一頁)七五頁など参照。なお、後に「ストラボンも、エペイロスの種族名として *Abgantes*, *Agrudes* (VII, 7, 8)」「*איטוריא*」の種族名として *Ejortades* (X, 2, 4) など *—fves* 語尾のものを伝えてゐる。Dymanes (*Δυμάνες*) も語尾がこの特徴に合致するから北西ギリシア系と思われる。

⑫ 五区とは「地縁的五部族を指す。その名称は *Pitane*, *Kono(s)-oura*, *Linnai*, *Mesa*, *Amyklai* である。註⑨参照。

⑬ ハウサニアスによると *Pharis*, *Geranthrai* など。

⑭ アミュクライの征服は、「二回行なわれたと思はれる」(前掲『西洋史学』VII, 所載拙稿、九一—〇頁参照)。

⑮ しかし、これ以上のことは何もい得ない。テバイ系の援助があつたことを断定する根拠も、まったく「存在しない」。

⑯ 「大レトラ」については、前掲『西洋古典学研究』XII 所載拙稿、二八一—三四頁参照。

⑰ 三部族にもとづく軍制が何時頃まで維持されたかについては、様々な見解があるが、五個の新部族(区)——これを *ota* とみる説もある——が三個の旧部族制を否定するものとは限らないから、旧部族制が軍制として残存したことは「十分」考えられる。しかし、他方、スハルタでは「前六世紀末までは、戦時には二王ともに出陣してゐる

(Hdt. V. 75)。したがって、その際、王と部族(新旧いずれにせよ)との数は一致し得ないわけである。とすれば、メッセニア戦争当時、五部族制にもとづく軍隊が三名によって指揮されていたとしても、特に、不自然ではなかったとも考えられる。

いずれにせよ、スバルタにおける hoplite phalanx の採用は前七〇〇年頃であるから、第一次メッセニア戦争後に、戦術の変化にともなう軍制の改革があったことは想像されるが、それ以前の軍制について、確言することはできない。なお、Lorimer, H. L., *The hoplite phalanx, with special reference to the poems of Archilochus and Tyrtaeus* (BSA, XLII, 1947, pp. 76-138) pp. 92-3. 参照。

④⑦ テュルタイオスの詩(Ht. 5)にも、テオポンホスの名のみが「メッセニア征服と関連して述べられている。

④⑧ テュルタイオスの詩には第一次メッセニア戦争の時の戦士を「我々の父」として述べている。

④⑨ したがって、リアノスのいうレウテュキデスとは別人であろう。

④⑩ この点については、後にも、若干、触れる。

④⑪ 前掲『西洋史学』LVII, 所載拙稿、一三二—一五頁参照。

④⑫ Chrimes, op. cit., p. 303. は 708 B.C. とし、*πρὸς*。なお、

Toynbee, A. J., *The Growth of Sparta* (JHS, XXXIII, 1913, pp. 246-75) p. 256. は「タラス移住の指導者たる Phalanthos が、スバルタにおけるアイゲウス家最後の王としており、したがってこの移住の時期に、アイゲウス家という王家は消滅したことになる。」  
④⑬ Toynbee, op. cit., p. 256; Huxley, op. cit., p. 37 参照。

三

先に、「大レトラ」の第二の眼目として、長老会と民会との法制化をあげたが、ここでは、それに関連して、archagetai について考えたい。archagetai とは、「大レトラ」の中に出てくるものであるが、まず、「大レトラ」の内容を示そう。なお、「大レトラ」には、意味が判然としない箇所もあり、いまだに、すべての研究者を納得せしめ得る決定訳は存在しないが、ここでは、私が、かつて、学会誌に報告した試訳を再録しておく。

(汝立法者は) Zeus Syllanios と Athena Syllania の社を設け、(新たに、地縁的な)部族を設け、(それを、更に) oba に分けて民衆をそこに任せしめ、archagetai を含む三十名の長老たちによって長老会を設立すべし。(かくして成立せる長老会は) 時に応じて、Babyka と Knakion の間にて、(民衆を)民会に召集し、そこにおいて、議案を提出し、また、(議場より退きて)民会を延期・休会せしむることを得べし。市民たるものが(民会を構成し)、採択権を保有すべし。<sup>④</sup>

この中で、特に、問題となるのは、長老会の構成である。メンバーが三〇名と規定されたことは、長老会の法制化を物語るが、と同時に、「大レトラ」制定当時までに、有力者が、略この数と同数となっていたことを示すと、い得よう。ところで、この三〇名には archagetai (ἀρχαγῆται) が含まれている。プルタルコス(Lyk. 6) は archagetai とは basileis を指す、<sup>⑤</sup> といっている

が、この見解は、弘く、受け入れられている。<sup>④</sup>しかし、私は、こゝで、archagetai という言語について、若干、考えてみたい。

archagetai とは、archagetes (ἀρχαγέτης) のドリス方言形 archagetes (ἀρχαγέτης) の複数形である。archagetes とは、「先導者」「第一の指導者」を意味する。ポリスまたは植民市の建設者、乃至、それに関する神、人間は、しばしば、archagetes と呼ばれる。<sup>⑤</sup>諸神の中では、特に、アポロンの称号として現れる場合が多い。それはギリシア人の都市建設が、アポロンの命にしたがってなされる場合が多いからである。植民市では、特に、Apollon Archagetes が尊崇される場合が多い。また、同時に、都市を建設したのも、死後、英雄または神(に近きもの)として、archagetes の称号を与えられるのである。それは、この語の本来の意義が、先に記した如く、「第一の指導者」であるから、移住、植民などを指導したものの称号として、ふさわしいためである。この本来の意義から考えて、移動期のドリス人も、その指導者を archagetes と呼んでいたことが予想される。スパルタに入ったドリス人は、伝承によると、Aristodemos——または、その二人の子——に率いられていたというが、この Aristodemos こそ、archagetes にほかならない。しかし、実際には、三部族各々の部族長が、各部族の指導者であるから、彼らが archagetes

と呼ばれていたものと思われる。スパルタの地に侵入して以後、特に、ポリスの形成に際して、部族長間に覇権争いが続いたが、それが、アギス家のテレクロスの覇権の確立によって、ようやく、整理期に入ったのである。しかし、みずから archagetes を称するものは、依然として、三人乃至はそれ以上あり、テレクロスは、覇権を確立したとはいえ、単教王制を、明確に、「大レトラ」に示すことは、部族長間の軋轢を増すことを考慮に入れ、みずからのみがドリス人の「第一の指導者」ではないことを明らかにするために、archagetai という複数形を用いたのであろう。かくすることによって、archagetes を自称するものをも納得せしめ、また、さらに、場合によっては、協力者たらしめることも可能である。「大レトラ」のこの部分から、かかる政治的配慮が読み取れるのである。

以上述べたところから、「大レトラ」に示された archagetai は、phylobasileis 乃至 phylarchoi と、略、同義である、と見るこゝとができる。したがって、archagetai は、そのまま、Basileis と同義だ、とするプルタルコス解釈は修正さるべきであらう。ただし、当時の archagetes が、すでに、かなり、王に近い存在となっていたことも否定できないところである。

スパルタに入ったドリス人が、何故、その部族の指導者達を

archagetai と呼んだのであろうか。一般に archagetes とは称号は、都市の建設者と結びつく神、英雄、建設者自身に与えられるもので、その子孫までが同じ称号を用いる例は知られていない。しかし、スパルタの場合は事情が、やや、異なる。先に触れた如く、もし、移動期のドリス人が、その部族長を archagetes と呼んでいたとすれば、彼らがスパルタに定住した後まで、それを維持したとしても異とするに足りない。特に覇権争いが激しく、単一支配者——王——となり得るものが、容易に出現し得なかったため、旧来の称号が維持されざるを得なかった、ということもあり得よう。いずれにせよ、スパルタにおける archagetes は、本来は、部族長の称号であった、と考えられるのである。<sup>①</sup>

① 前掲『西洋古典学研究』XII 所載拙稿三三頁。

② 「大レトラ」の訳語の英訳には、the chief leaders なる訳語をあてた。『西洋古典学研究』所載拙稿の英文要約一同誌一七六頁以下参照。

③ 「大レトラ」の訳文中の（ ）内は原文にはないが、理解を助けるために、私が補ったもの、へ内は原文が崩れているため、さまざまな復原がなされたが、ついでにさまざまな訳が考えられる部分である。

④ archagetes を王の official title と見る説を参照 (Michell, op. cit., p. 104. 参照)。

⑤ 一般に「都市建設者 (oikourgos) には、doryrhetor と同じ称号が与えられた (Strab. VIII, 5. 5)。

⑥ Nilsson, M. P., Geschichte der Griechischen Religion, I. Band, 2. Aufl., 1955, S. 637-40.

⑦ ただし、二王制成立後も、何らかの形でこの称号が維持されていたかもしれない。

#### 四

先に、第二章で、二王制の成立時期を前七〇〇年頃と推定したが、次に、king-lists を検討してみよう。

スパルタの歴代の王名を伝えるものは、先にも述べた如く、ヘロドトスとパウサニアスであるが、そのほかに、部分的に、伝えられたものがある。<sup>①</sup>ヘロドトスとパウサニアスとの両伝が、完全には、一致しないことは周知の事実であるが、そのリストを Ageidai のリストと併記すると、次頁の表のようになる。

先に、テレクロスの時に、覇権が確立されたと推定したが、アギス王家がエウリュポーン王家よりも古い王家である、という見解は多い。<sup>②</sup>テレクロス以前のアギス王家の諸王の名には、Iaos (Aaos) を含むものが三名見出されるが、それは、ホメロスの basileus が統率している軍隊が Iaos と呼ばれていたことと符合するよう<sup>③</sup>に思われる。また、Echestratos, Doryssos の名も軍事的な香が<sup>④</sup>強く、いずれの名前も (Iaos をも含めて) 軍隊の指揮官を暗示している。テレクロス以前のこれら諸王にあたる人物の実在性は、

Aristodemos		Argeia		Theras	
Eurysthenes	Prokles	Prokles		Oiolykos	
Agis	Soos	Euryphon		Aigeus	
Echestratos	Eurypon	Prytanis			
Labotas (Leobotes)	Prytanis	Polydektēs			
Doryssos	Eunomos	Eunomos			
Agesilaos (Hegesilaos)	Polydektēs	Charilaos		Euryleon	
Archelaos	Charillos	Nikandros			
Teleklos	Nikandros	Theopompos			
Alkamenes	Theopompos	Anaxandrides			
Polydoros	Archidamos	Archidemos			
Eurykrates	Zeuxidamos	Anaxileos			
Anaxandros	Anaxidamos	Leutykhides			
Eurykrates (Eurykratides)	Archidamos	Hippokratides			
Leon	Agēsikles	Hegēsikles			
Anaxandrides	Ariston	Menares			
Kleomenes	Leonidas	Demaratos		Leutykhides	
<AGIADAI>	⋮	<EURYP(H)ONTIDAI>	⋮	<AIGEIDAI>	
(Hdt. VII. 204)		(Paus. III. 7. 1ff.)	(Hdt. VIII. 131.)	(Hdt. IV. 149)	
(Paus. III. 2. 1 ff.)				(Paus. IV. 7.8)	

伝えられるその治世年数と共に、きわめて、疑わしい。これらアギス家の初期の諸王は、おそらく、伝記作者の創作になるもので、その際、軍事的色彩の濃厚な過去の英雄の名前が思い出されたり、あるいは、新に、創出されたりしたのであろう。それは、正に、テレクロスの優位を、父祖の優れた実績の当然の帰結として、正当化せんとしたものに他ならない。

これに対して、エウリュポソンの諸王の名前は、より明らかに、後代の創作であることを示している。Prytanis, Eunomos, Polydektēs などの名は、もはや、エウリュポソンの自己宣伝以外の何ものでもない<sup>⑦</sup>。エウリュポソンから数えて六代目のニカンドロス、その後を継いだテオポソンのあたりから、実在の人物となってくる。

以上のように、王名から推測すれば、アギス家が、もっぱら、軍事力の優位と指導者の性格を強調しているのに対し、エウリュポソ家は、民衆と協調し、秩序ある社会を目指してきたことを強く訴えている。いいかえれば、アギス家の諸王は、文字通り、archagetas 的な名を有するのに対し、エウリュポソンの諸王には、かくの如き名を有するものを見出し得ないのである。

アギス、エウリュポソ、両王家に対して、アイゲウス家の方は、名祖アイゲウスとメッセニア戦争時の指揮官エウリュレオンとの

間の三代の人物の名が伝えられていない。ヘロドトス (IV. 149) によると、アイゲウス家の人々の子供が、生き永らえず、若死するので、Laios と Oidipus との Erinyes の社を建立した、という。このことは、アイゲウス家がテバイの王家の後裔であることを暗示するが、さらに、Anteston<sup>8)</sup> が Laios と Oidipus との Erinyes に追われて、ペロポネソスのドリス人のもとへ移住した、というパウサニアス (IX. 5. 15) の記事も存在する。したがって、Anteston からアイゲウスに致る系譜は、テバイ系のもの、と認めることができるが、メッセニア戦争時のエウリュレオンが、実際に、この系統をひくものとは思われない。アイゲウスの後、三代の名が伝えられていないが、おそらく、アギス、エウリュレオン両家と同じく、後代の創作になる英雄的な名の人物が語られたであろう。エウリュレオンが、真に、テバイ系であるとは信じ難いが、しかし、彼がテバイ系であると称したこと、アイゲウスと結ぶ系図を有することは、テバイ系が、かつては、かなり、有力であったことを思わしめるのである。

では、アギス家、エウリュレオン家が、それぞれ、その名祖とするアギス、エウリュレオンとは何者であろうか。私は、これに対して、確信をもって、答えることはできない。しかし、次のように推論するのが、最も蓋然性の高いものであろうと思う。すなわち、

彼らはドリス人がスバルタに侵入した時の部族長——archagetai——のうちの二名である、否、むしろ、そう信じられている存在であったのであると。もちろん、その部族が三部族中のいずれの二部族であったか、を推定することは不可能である。なお、アギス (Agis) という名は、「指導者」を意味するようである。

ストラボン (VIII. 5. 4) によれば、アギスがそれまでドリス人と同等の扱いを受けていた住民から同権を奪ったとしている。すなわち、ドリス人のみをスバルタの地に集めて、中央の権力を確立せんとする際の変革が、後に、王家の祖アギスの事跡として伝えられたのである。これに対して、エウリュレオンについては、彼が民衆に好意を示したが故に、その家系が彼の名によって呼ばれるようになった (Pint. Lyrk. 2)、というのみで、アギスの場合とは、かなり、趣が異なっている。アギスは国の基礎を固めた初代の王であり、その後も、まさに、archagetai にふさわしい名を与えられた王達が系図に現れるが、エウリュレオン家の方は、代々の王名も、もともと、平穩無事に発展した国家の歴史の如き観を呈しており、また、特に、民衆へ好意を示していることが強調される (Pint. Lyrk. 2)。

以上のことは、アギス、エウリュレオン両王家が、少くとも、伝承の如き双生児の兄弟を祖とする二王家ではないことを示し

ている。両王家の系図は、共に、ドリス人ではあっても、互に、血縁的な関係はなく、相対立する *archagetai* の一人として、覇権を争った間柄にあるものが、自己宣伝として、創出した系図にほかならない。アイゲウス家にも、おそらく、同様な系図が存したことと思われる。アギス家において、アギスに初まる系図が創り出されたのは、覇権を確立したテレクロスの時代、エウリュポソン家において、エウリュポソンを始祖とする系図が創られたのは、ニカンドロス乃至テオポソスの時代であろう。しかるに、ヘロドトス、ストラボン、パウサニアなどは、すべて、これら名祖の、さらに、父に当る人物の名を伝えている。すなわち、アギスの父は *Eurysthenes*、エウリュポソンの父は *Prokles*、<sup>⑩</sup> アイゲウスの父は *Oioiykos* である。そして、*Eurysthenes* と *Prokles* とは双生児であり、*Oioiykos* はこの双生児の母系の従兄弟にあたる、とされている。<sup>⑪</sup> しかし、系図の上で、各名祖とその父とが結ばれたのは、さらに、後の時期であろう。少くとも、前記の両王家の系図が製作された当時には、双生児の祖を持つヘラクレスの子孫であるという意識は持っていなかった筈である。両者の覇権がゆるぎないものとなった時、はじめて、同等の地位にある両王家の祖先としてふさわしい双生児——しかも、伝承上、ドリス人をスパルタに導いてきたヘラクレスの子孫 *Aristodemos* の双

生児に系図を結びつけたものである。<sup>⑫</sup>

この両王家の系図の双生児への結びつけが、両王家の覇権確立後であることは、その王家が *Agidaei*, *Eurypt(h)ontidaei* と呼ばれ、*Eurysthenidaei*, *Prokleidaei* とは呼ばれていなかった (*Strab.* VIII. 5. 5) ことから明らかである。すなわち、双生児に結合せられる以前に、アギス、エウリュポソンを祖先とする系図が、一応、完成していたのである。一方、アイゲウス家の系図が完成されるのは、やはり、メッセニア戦争時の指揮官エウリュレオンの当時ではなからうか。ただし、同家の場合は、*Eurysthenes* とアギス、*Prokles* とエウリュポソンを結びつけるが如き系図の結合が、*Theras* と *Oioiykos*、または *Oioiykos* とアイゲウスとの間において行なわれたか否か、判然としなない。前にも述べたように、系譜的には、テバイより移住した *Auteston* からアイゲウスまで一貫しているが、最も問題があるのは *Oioiykos* である。この人物は *Theras* とアイゲウス家とを結びつける役を果すに過ぎない人物ではなからうか。もっともアイゲウス家がテバイ系の一派であることは、*Laios* と *Oidipus* との *Eriyres* の社を建てたというヘロドトス (*IV. 149*) の記事からも推測できる。しかし、そのアイゲウス家とアイゲウス家の出身と称するエウリュレオンとは、覇権争の激しかった時代が、いわゆるアイゲウスの時代と

エウリュレオンの時代との間に存するため、直接、結びつく公算が大である、とはいえない。なお、この家の系図では、名祖アイゲウスとメッセニア戦争時代のエウリュレオンの名だけが伝えられ、エウリュレオンの前後は、一切、その名が伝えられていないが、これは、同家が覇権争いから脱落したためであろう。二王制成立後は、アイゲウス家の代々の王名が伝わるのが不都合であったので、故意に、抹消されたのであろう。二王制を安定せしめるには、これは、必要な手段であった。ただ、エウリュレオンの名のみは、メッセニア戦争と関連して語られるために、後まで、伝えられたと思われる。

ヘロドトス (VI. 52) は、スバルタの二王家の不和を Eurysthenes, Prokles 兄弟 (ヘロドトスはこの二人を双生児といっていない) に帰しているが、本来、覇権を争った間柄である両王家であるから、常に、協調し得なくても不思議ではない。アギス家、エウリュポソンの系図が双生児に結合され、本来、同一の家に発していることが、系譜の上で、確定された時期を定める手がかかりはないが、両王家が協調せざるを得なかったと思われる第二次メッセニア戦争 (前七世紀前半) 中ではないかと推定せられる。

- ① たとえば Diod. VII. fr. 8; Plut. Lysk. 1.
- ② 第二章(7)説参照。
- ③ Labotas (Leobotes), Agesilaos (Hegestilaos), Archelaos (3)

名 (Oliver, op. cit., p. 5)。

④ Oliver, op. cit., p. 5. 参照。

⑤ 前者は「軍隊の統率者」を意味し、後者は槍 (ἀσπίς) と関係のある名である。

⑥ Diod. VII. fr. 8 には、アギス家のアルカメネス、エウリュポソンのテオポソニスまでの各王の治世年数が示されている。

⑦ *phōreus* (prytanis) とは「首長」*ephoros* (eunomos) とは「善法を与える」*κοινός* *κοινότητες* (polydectes) とは「多くのものを受け入れることを意味している。エウリュポソンの王 (首長) が善政をしたことを主張するものである。

⑧ 第二章で触れたテバイ系の Theras なるものの父に当る。Oldipus から四代目のテバイ王 Tisamenos の子である。

⑨ Paus. IV. 7. 8. によれば Antestion—Theras—Oloiykos—Aigeus となる (前掲系図参照)。

⑩ テレクロスのアミクタライ征服によって完成される。

⑪ エウリュポソンの父としては、ヘロドトス (VIII. 131) は Prokles であるとし、パウサニアス (III. 7. 1) は Soos とし、その Soos の父を Prokles としている。しかし、Soos は、さらに、後の時代の挿入と考えられる。エウリュポソンの系図はヘロドトスの伝えるものとパウサニアスの伝えるものとは、ほかに、異なるところがある (前掲系図参照)。おそらく、ヘロドトス以後に、スバルタにおいて、エウリュポソンの系図に改訂がほどこされたものと思われる。

⑫ 前掲系図参照。

⑬ Eurysthenes と Prokles とが双生児であるという伝承も、両王家の地位が同等であることを説明するために生じたもので、本来は、Eurysthenes の方が長兄であったのではないか、という疑いを生じ

90. Hdt. VI. 52; Paus. III. 2. 1 など、Eurythenes の *se-niority* を認むべき。

⑭ しかし「二王家の双生児起源の創作の裏には、明らかに、Dioskuroi (双生児 Kaster, Polydenkes) に対する信仰がある。二王家は精神的には、」J. S. Dioskuroi の子孫であることを自覚している (Michel, *op. cit.*, pp. 106-7)。「二王が出陣する際には、Dioskuroi も、共に、出陣すると考えられていたが、前六世紀末に、二王のうち一方のみが出陣するように規定されると、Dioskuroi の方も、一方は、国内に止まる」とされた (Hdt. V. 75)。「」S. ことば、また、Dioskuroi が、スパルタ軍の守護神であるというよりも、むしろ、二王家に近い存在である、と考えられていたことを示している。

## 五

以上の考察によって、その実在が、略、明らかにする王は、アギス家のテレクロス、エウリュポソンのニカドロソス、テオポソス以後であることを示したが、先に掲げた *Eurythenes* には、さらに、多くの問題がある。例えば、テオポソス以後のエウリュポソンの王統が、ヘロドトスとパウサニアスとは異なっていることがあげられる。そして、この問題は、ヘロドトス (VIII. 131) が「レウテュキデスのすぐ前に記された七人を除き、すべて、スパルタの王である」と①いっていることによっても、解決され得ない。これを、如何に解するべきかについては、様々な見解があるが、いずれも、必ずしも、説得的とはいえない。②③

また、スパルタの歴史は第二次メッセニア戦争以後、約百年間、きわめて、不明な点が多い。前五〇年前後から、スパルタの歴史は、一層、明確にたどることができるようになり、同時に、*king-lists* の上でも、混乱がなくなる。ただし、考古学の成果によると、この最も歴史の不明な時期が、文化的にも、経済的にも、スパルタの最も繁栄した時代に当る、という。④なお、この時代の王名についてみると、テレクロス、ニカンドロス以前の如き両王家の王名の顕著な差異が存在しなくなること気づく。特に、両王家に *Anax (anax)* と結ばれる名前があらわれることは、ようやく、両王権が安定したことを思わしめるものがある。

以上、スパルタの王制に関する若干の問題を考察したが、未解決のまま残されたものもある。本稿におけるスパルタ二王制の成立、*archegetai* の本質、スパルタ二王家の初期の系譜についての管見から、ポリスの成立期を、直接、引き出すことはできない。しかし、見通しとして、次のように考えることができよう。

ポリス・スパルタはアミュクライの征服をもって、はじめて、安泰なるものになったのであるが、スパルタへの集住は、この時に行なわれたのではなく、それより、以前である。集住によって、ポリスの成立がなされようとした時こそ、覇権争いは、最も激し

くなるのであるが、かくの如き情勢の時に、テレクロスが出現したのである。したがって、ドリリス人のスパルタへの集住をもって、ポリスの成立とするならば、その時期は、テレクロス以前に溯ることもあり得よう。しかし、アミュクライの征服によって、はじめて、ドリリス人の先住ギリシア人に対する支配が確立されるのであるから、ポリスの成立は、アミュクライ征服の時期に置くべきであらう。すなわち、前八世紀前半、「大レトラ」の制定される直前である。

① すなわち、前掲の系図（エウリュポソンのヘロドトスによる分）の

に於て Anaxandrides から Menares までは、王のなかりたることを示す。

② Le Paulmier は、上記引用文中の「七人を除き (αὐτῶν ἑπτὰ)」を「二人を除き (ἐξ αὐτῶν δύο)」と読むべきだとする (Huxley, op. cit., p. 117, 参照)。

③ Chrimes, op. cit., p. 334; den Boer, op. cit., pp. 66-9; Huxley, op. cit., pp. 117-8, 参照。

④ Chrimes, op. cit., pp. 305-6; Michell, op. cit., pp. 11-6; Huxley, op. cit., pp. 61-5.

⑤anax (ἄναξ) とは、君主の意である。

(京都大学研修員)

above all in regard to the Japanese Liberal Party. At the time when he dispatched this letter to his government in Paris, the political situation in Japan was becoming critical. In addition, the Sino-French war had broken out and French troops had been attacked by the Chinese in Taiwan. Accordingly, it is quite probable that Sienkiewicz's communication influenced subsequent Franco-Japanese relations along the following lines: (a) it induced the Jules Ferry cabinet to refuse any assistance to the Liberal Party in Japan; (b) it dissuaded the Paris government from making an anti-Chinese pact with Japan; and (c) it led France to refuse Japanese proposals for a new treaty.

### Some Remarks on the Spartan Dyarchy

by

Yūichiro Shinmura

Sparta was a dyarchy not a monarchy. In ancient times dual or even multiple kingship or chieftainship was not uncommon, and it is a mistake to regard the dyarchy of Sparta as unique.

The Dorian invasion into the Peloponnese took place some time in the twelfth century B. C. In early Sparta there were three Dorian tribes, the Hylleis (Heraklids), Pamphyloi and Dymanes, presumably with their own phylarchs, and the so-called Theban Aigeidai. For a long time leadership was competed among the three or more phylarchs. In the early eighth century B. C. Agiad Teleklos held undisputed leadership, but after his death three chieftains of the Agiads, Eurypontids and Aigeidai reigned together with equal powers. The last dropped out about 700 B. C. for some unknown reason. Since then the Agiads and Eurypontids assumed the title of royal houses. And later they both claimed descents from twin brothers, Eurysthenes and Prokles, the sons of Heraklid Aristodemos.